



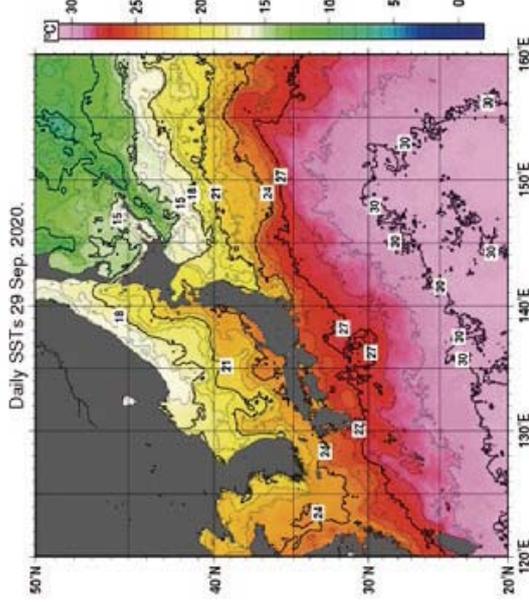
## 古川博士の気象コラム



古川 武彦…理学博士。  
元気象庁予報課長、札幌  
管区気象台長。退官後  
に「気象コンパス」を  
立ち上げ、気象の啓発  
活動などを行う。

台風14号、この原稿の執筆時点では進路がはっきりしていませんが、大事に至らないことを祈ります。

台風とは、熱帯低気圧が発達して、中心付近の最大風速が毎秒17m以上となったものを指します。強さは最大風速によって、強い(33～44m)、非常に強い(44～54m)、猛烈(54m以上)の3階級です。大きさは、風速15m以上の強風域の半径によって、大型は500～800km、超大型は800km以上に分けられています。



近年、世界的に台風が強大になっており、その原因は「地球温暖化により海面水温が上昇し、大気中の水蒸気量が増加しているから」と言われて

います(左図参照)。  
台風を巨大な自然のエンジンに例えると、その燃料は水蒸気です。台風の上昇気流で水蒸気が凝結して雲が生まれる際に、ほくほく莫大な熱エネルギーを周囲に放出して暖めるため、空気がさらに軽くなり、気圧が下がって発達につながります。温暖化の原因である二酸化炭素の増加を抑えるためにも、風力発電やソーラー発電など自然エネルギーの利用が望まれます。